

今日の英米演劇 5

今日の英米演劇 全5巻 訳者略歴

菅原 卓	演出家。劇団民芸文芸演出部。
杉山 誠	演劇評論家。共立女子大学教授。
倉橋 健	早稲田大学文学部教授。
鳴海 四郎	立教大学教授。劇団文学座文芸部。
小田島雄志	東京大学助教授。劇団文学座文芸部。
木村 光一	演出家。劇団文学座文芸部。
沼沢 治	東京工大助教授。現代演劇協会委員。
斎藤 偕子	ニューヨーク大学演劇(M・A)科修了。
喜志 哲雄	京都大学助教授。現代演劇協会委員。

今日の英米演劇 第五巻 (全五巻)

定価 八八〇円

一九六八年一〇月一日印刷
一九六八年一〇月二二日発行

訳者 ①

喜 沼 倉
志 沢 橋
哲 治
雄 治 健

発行者

草 野 貞 之

印刷者

田 中 昭 三

発行所

株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

(電話東京(291)七八一一)(代)

振替東京三三二二八

郵便番号一〇一

理想社印刷・松岳社製本

今日の英米演劇

5

今日の英米演劇

ストップパード / [redacted] ランツと

ギルデNSTAUNは死んだ

ニ [redacted] ヨー・エッグの死の一日

ヴ [redacted] / アメリカ万歳

フ [redacted] / スクーバ・ドゥーバ

白水社

目次

ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ……………	7
ジョー・エッグの死の一日……………	95
アメリカ万歳……………	185
スクーバ・ドゥーバ……………	269
解説（喜志哲雄）……………	331

トム・ストッパード 作／倉橋健 訳

ローゼンクランツと
ギルデンスターンは死んだ

三幕

Tom Stoppard

ROSENCRANTZ AND GUILDENSTERN ARE DEAD

1967

© Fraser & Dunlop(Scripts)Ltd.

Translation rights arranged through ORION PRESS, Tokyo, Japan

人物

ローゼンクランツ

ギルデンスターン

座長

アルフレッド

悲劇役者たち四人

ハムレット

オフィーリア

クローディアス

ガートルード

ポロニアス

兵士

ホレイシヨ

その他

廷臣、使節、兵士、従者など

第一幕

ふたりのエリザベス朝人が、どこかわからないがこれといって目だつ特徴のないある場所で、時間つぶしをしている。

ふたりとも、帽子、外套、杖その他、身なりがよい。

おのおの、大きな皮製の金袋を持っている。

ギルデンスターンの袋はからに近い。

ローゼンクランツの袋はほとんどいっぱいである。

というのは、ふたりはつぎのようにして投げ銭の賭をしているのである。すなわち、ギルデンスターン（今後「ギル」と呼ぼう）は自分の袋から貨幣を取り出し、それをはいいて落とす。ローゼンクランツ（今後「ロズ」としよう）はそれを調べて「おもて」（事実そうなのであるが）と宣言し、自分の袋のなかにしまう。ふたりはこれを何度もくりかえす。彼らは、もうかなりの時間、これをやっていたらしい。

「おもて」ばかり続けて出ることとは不可能である。

だがロズは、べつに驚いた様子も見せない。なにも感じないのである。とはいえ彼も、友人からあまり多くの金を取りあげることに、いささか当惑はしているのである。これを彼の性格の特徴としよう。

ギルは事のふしぎさに気がついてゐる。だが金のことを気にしているのではなく、なぜ「おもて」ばかりが続けて出るのかということの意味を気にしているのである。もっとも、気がついてはいいても、それによってあわてたり度をうしなったりしているわけではない。これが彼の性格の特徴である。

ギルは腰をおろしている。ロズは立っている。(彼は貨幣を回収するために動きまわっている)ギルが貨幣をはじく。ロズがそれを調べる。

ロズ おもて。

彼はそれを拾い、自分の袋にいれる。これが何度かくりかえされる。

おもて。

ふたたび。

おもて。

ふたたび。

おもて。

ふたたび。
おもて。

ギル (貨幣を空中にはじいて) そうあっさりいわないで、もうちょっと気をもたせるやり方だってあるだろうに。

ロズ おもて。

ギル (もう一つ貨幣をはじいて) 結局は運にすぎないにしても。

ロズ おもて。

ギル 運と呼んでよけりゃの話だが。

ロズ (顔をあげてギルを見る) 七十六対零。

ギルは立ち上がるが、べつに行くところもない。肩こしにまた貨幣をはじいてそれを見ようともせず、あたりに——といってもなにもないのであるが、その空漠たる周囲に注意をむける。

おもて。

ギル 気の弱い男なら、まあ、すくなくとも確率の法則にたいする信頼の念はぐらついてくるだろうな。(舞台の奥のほうを見にゆきながら、肩こしに貨幣を投げてよこす)

ロズ おもて。

ギルは舞台の境界を調べ、そうしながらさらに貨幣を二枚はじいてよこす。もちろん一枚ずつであ

る。ロズはそのたびに「おもて」と宣言する。

ギル（考えこみながら）確率の法則は、奇妙なことに、ある命題と関連があるとされてきた、つまり、もし六匹の猿が……（自分がいいだしたことに自分でびっくりする）……もし六匹の猿が……

ロズ 賭をするのか？

ギル 猿がか？

ロズ いや、おまえさ。

ギル（わかつて）ああ、やるよ。（貨幣をはじく）平均の法則は、おれが思うにだ、六匹の猿を空中に投げてみて、ためしたわけだ、うらかおもてか、つまり尻から落ちればうら、頭から落ちれば——

ロズ おもて。（貨幣を拾う）

ギル こういう話は、いずれにせよ、まあ、たいして実のある話とは思えんだろうね、たとえ猿のことはぬきにしてもだ。おまえさんは乗ってこんだらうな。おれにはおもしろいが、おまえさんは違う……（貨幣をはじく）

ロズ おもて。

ギル そうだらう？

ロズ おもて。

くりかえす。

おもて。（ギルを見る——ばつの悪そうな笑い）ちょっと

と飽きてきたな、え？

ギル（ひややかに）飽きた？

ロズ まあね……

ギル もう少し、気をもたせるようなやり方をしてはどうだ？

ロズ（無邪気に）気をもたせるって、なにが？

短い間。

ギル 収益漸減の法則というやつに違いない……まじないがきかなくなった感じだ。（なんとか気をとりなおす。貨幣を一枚だして高くはじき、それを受けとめ、もう一方の手の甲の上にふせて調べ——それをロズに投げる。がっくりきて、腰をおろす）チャンスは五分五分のはず

なんだが……おれの計算が正しいとすれば。

ロズ 連続八十五回——記録やぶりだ！

ギル なにをバカな。

ロズ ほんとうさ！

ギル（腹をたてて）じゃ、それだけか？ それだけなのか？

ロズ なにが？

ギル 新記録？ せいぜいがそんなところか？

ロズ そうだな……

ギル 疑問はもたんのか？ これはおかしいぐらい、思わ

んか？

ロズ きみが自分ではじいたのだ。

ギル ちよつとも疑つてみないのか？

ロズ (からまれて、攻勢にでる) でも、おれは勝つたんだ——そうだろう？

ギル (ロズに近づいて——前よりはおだやかに) もし負けたとしたら？ 八十五回、つぎつぎに裏ばかり出たとしたら？

ロズ (むつとりと) 八十五回、続けざまに、うらか？

ギル そうさ！ どう思う？

ロズ (よくわからず) そうさな……(おどけて) そうだ、はじめの前に、おまえの貨幣を調べておくよ。

ギル (ひきさがって) 安心したよ。すくなくとも予言や予知の要因として、人間の利己心がはたらくことがわかったんだからな……結局はそれさ。おまえがあんまり頭から信じきっているの、おれはまた……おまえだけ……(彼は突然ロズのほうをむき、手を差しだす) さわれ。

ロズはギルの手を軽く打つ。ギルは彼を自分のほうへ引きよせる。

ギル (前よりも強く) おれたちはいっしょに投げ銭をやつてきた、ずっと——(乱暴とも見えるようないきお

いで彼をつきはなす) これが初めてじゃない、投げ銭をしたのは！

ロズ そうさ——考えてみれば、ずいぶん長いことやつてきた。

ギル どれぐらいだ？

ロズ わすれた。そうだな——八十五回！

ギル うん？

ロズ これを破るのはちよつとたいへんだと思うな。

ギル おまえが思うのは、そんなことか。それだけか？ 恐怖はないのか？

ロズ 恐怖？

ギル (激怒して——貨幣を地面に投げる) 恐怖さ！ ど

きりとさせるやつさ！

ロズ おもて。(自分の袋のなかにそれをいれる)

ギルはがっかりして腰をおろす。彼は貨幣をだし、それをはじき、両足のあいだに落とす。それをじっと見て、拾い、ロズに投げる。ロズは袋にしまう。

ギルはもう一つ貨幣を取り出し、はじき、受けとめ、片方の手の上にふせ、見て、ロズのほうへ投げる。ロズはそれを自分の袋にいれる。

ギルは三枚目の貨幣をだしてはじき、それを右手

で受けとめ、左手首の上にふせ、さらにはねて空中にとばし、落ちてくるのを左手で受け、左足をあげてその下をくぐらして貨幣を投げ、それを右手でとって頭のてっぺんにふせて、そのままにする。ロズが近づき、それを調べ、自分の袋にいれる。

ロズ どうやら――

ギル そうだな。

ロズ きょうはついていないらしいな。

ギル とも思わんね。なにかがある。

短い間。

~~ロズ~~ 八十九枚。

ギル これはなにかいわくがあるに違いない、富の再分配

ということに別にして。(沈思する) 考えられる理由、

その一――おれはみずからの意志でこれをしているんだこかおれの内部に、両面ともおもてである貨幣を投げた人間の精がやどつていて、知られざる過去のひそかなつぐないのために、あえて負けを承知で賭をしている。

(ロズをめがけて貨幣をはじく)

ロズ おもて。

ギル その二――時の流れが静止し、ひとたび投げられた一個の貨幣の単一の経験が九十回くりかえされた……

(貨幣をはじき、それを見、ロズに投げる) どうもこれはあやしい。その三――神の介入、すなわち、やつには神によって選ばれた者として天からの親切、おれにはロトの女房(注1)のような天罰。その四――個々に投げられる個個の貨幣は、それぞれ「うら」か「おもて」が出る運命にあり、したがって(貨幣をはじく)投げられるたびにおもてが出たとしても別にふしぎはないという原理の壮絶な証明。(おもてが出る。彼はそれをロズに投げる)

ロズ こんなことがあろうとは夢にも思わなかった！

ギル 三段論法――一、彼は、こんなことがあろうとは夢にも思わなかった。二、彼は、家に手紙を書くとは夢にも思わなかった。三、だからこんなことは、家に手紙で書くまでもないこと……家か……まずなにを思い出す？

ロズ うん、そうだな……まっさきに頭に浮かぶものっていう意味か？

ギル いや――おぼえている最初のものさ。

ロズ ああ、そうか。(間) いや、だめだ、わすれた。遠いむかしの話さ。

ギル (しんぼう強く、だが、じりじりして) おれの意味がわかつちやいない。いろいろ忘れてしまったあとの最初のものはなんだというのだ？

ロズ そうか、わかった。(間) 忘れてしまった質問を。

ギル、飛びあがり、ゆっくりと行ったりきたりする。

ギル きみは幸福か？

ロズ なんだって？

ギル 満足か？ しあわせか？

ロズ まあね。

ギル これからどうしようというんだ？

ロズ さあ。きみはなにがしたい？

ギル べつに。なんにも。(歩きまわるのをびたりとやめる) そうだ……使いの者がきた、おれたちにきてほしいと。(ロズのほうをむき、一気にしゃべりだす) 三段論

法その二——大前提、確率は自然力のなかで作用する要因である。小前提、確率はいま要因として作用していない。結論、ゆえにわれわれはいま、反自然的、非自然的、あるいは超自然的な力の支配下にある。さ、討論だ。(ロズはあけにとられる。気むずかしげに) 冷静にいこう。

ロズ おれはどうもそういうのは——どうしたというのだ？

ギル 現象の考察への科学的アプローチは、恐怖という純然たる感情に対する防御である。時間が存在するかぎ

り、冷静に把握し固執すること。さあ、前の三段論法に反証しよう、手のこんだやつだ、よく聞いていけば、おもしろいということがわかる。もし、今のべたように、反自然的、非自然的、超自然的力のなかにおける確率は、確率の法則が要因として作用しないということであると仮定すれば、大前提の確率は要因として作用することはない、と認めなければならない。その場合、確率の法則は反自然的、非自然的、超自然的力のなかで作用することになる。が、現に確率はあきらかに作用していないのであるから、したがってわれわれは、結局、反自然的、非自然的、超自然的力のなかにとらえられてはいないのである。十中の八九、そうだ。これはおれ個人にとつては大きな救いだ。(短い間) たいへん結構なことだ——(彼はぎりぎりの病的興奮状態をかううじておさえて続ける)、ところが、われわれはいっしょに投げ銭をしてきた、いつからかは知らないけれど。その間ずっと、(もしずっとだったとすれば、だ)、おれたちはふたりとも、はじきあげられては落ちてくる一対の金貨以外のなにものでもなかったような気がする。こんなこと言ったからといって、驚いてもらってはこまる。驚かないということこそ、おれがしつかりつかみたいと思っていることなんだ。ふつう投げ銭をする連中が平靜でいられるのは、

一に法則にかかっている。いや、むしろ傾向といったほうがいいかもしれないし、あるいは確率といつてもいい。ともかく数学的に計算しうる偶然性だ。これあるがゆえに大負けしてもくさらず、勝ちすぎても相手をくさ

らせない。これは一種の調和と信頼を助成する。それは偶然的なものと運命によって定められたものをむすびつけて一つの確固たる結合となし、われわれはそれを自然とよんだ。つまるところ太陽は、沈んだのおなじだけ昇ったのであり、貨幣は、うらを見せたのおなじだけ、おもてを見せたのである。そのとき、使いの者がやってきた。われわれを呼びにきたのだ。ほかにはなにも起こらなかった。連続して投げられた九十二個の貨幣は、連続九十二回、おもてをだして落ちた……そして最後の三分間に、風のない日の風につて流れるドラムと笛の音をきいた。

ロズ（指のつめを切りながら）もう一つの奇妙な科学的現象は、指のつめは死んでからものびるということだ、あごひげとおなじように。

ギル なんだって？

ロズ（大きな声で）あごひげ！

ギル しかしおまえは死んじやいない。

ロズ おれはべつに、死んでからのびはじめるとはいわな

かった。（間。前よりもおだやかに）指のつめは生まれる前ものびる、あごひげは違うけれど。

ギル なんだって？

ロズ（さけぶ）あごひげ！ どうしたんだ？（考えこんで）一方、足のつめはけつしてのびない。

ギル（ぼんやりして）足のつめはけつしてのびない？

ロズ そうだろう？ おかしなことだ——手のつめはしょっちゅう切る。そしておれが切ろうかなと思うたんに、きまつてのびているんだ。たとえば、いまだ。だのに、足のつめに関するかぎり、たしかに一度も切ったおぼえがない。当然、のびにのびて足のうらにからまつてもいいころなのに、そうはならない。ぜんぜんわすれてしまっているんだ。あるいは、うわのそらで、なにかほかのことを考えているときに、切っているのかもしれない。

ギル（こののんびりした話をひきしめるように）きょうの最初の出来事、おぼえているか？

ロズ（即答する）目をさました、かな。（はたと思いあたって）ああ、わかった——あの男、外国人、あれがおれたちを起こした——

ギル 使者だ。（ほっとして腰をおろす）

ロズ そうだ——朝まだき、馬にのったひとりの男がよろ

い戸をたたき——さけぶ。「うるさい、なにごとだ？

あっちへ行け！」——だが、そいつはおれたちの名前を呼んだ。おぼえているな、あいつがおれたちを起こしたんだ。

ギル そうだ。

ロズ おれたちに来てくれといった。

ギル そうだ。

ロズ だから、こうしてここにいるのだ。(あたりを見まわし、ふしぎそうな顔をし、それから説明をつけくわえる) 旅にでたのだ。

ギル そうだ。

ロズ (芝居がかって) いそぎの——緊急の要件だった。

王さまのおめし、じきじきのおことば——国家の大事なやも応もない。馬小屋の庭さきのたいまつ。くらにまたがり、飛ばしに飛ばしてここのまで。案内人たちは一刻もはやく任務を達成せんと、先をいそいで行ってしまつた！ つくのがおかれて手おくれになるといけないといつて！

ギル 手おくれって、なにが？

ロズ 知るわけないだろう？ まだ、ついちゃいないんだから。

ギル じゃ、ここでのなにをしているんだらう——自分にき

いているんだ。

ロズ きくのは大いに結構。

ギル さきをいそいだほうがいいかもしれん。

ロズ 考えるのは大いに結構。

ギル さきをいそいだほうがいいかもしれん。

ロズ (いきおいこんで) そのとおり！ (間) で、どこへ？

ギル 前へ。

ロズ (フットライトのところまで前進する) ああ。(ためらう) どっちへ——(うしろをむく) おれたち、どっちから——？

ギル 実際問題として初めからやりなおし……目をさます。ひとりの男が馬にのつて、よろい戸をたたいていゝる。ある朝はやく、おれたちの名前がよばれた。使者、おめしだ……投げ銭の新記録。まさか……えらばれたのではあるまい……おきざりをくうために……どこへなりとかつてに行けと……当然どこかへ行けることに……なっていたはずなんだがな。

ロズ (ふと耳をすます) おい——！ おい——

ギル うん？

ロズ 聞こえる——聞こえたような気がする——音楽が。ギル、からだをおこす。